

ルピクリンによる全面土壌消毒が行なわれていたが、最近では耕耘一畦立てークロールピクリン注入ーポリマルチが一工程で行なわれる機械化一貫技術体系が確立し、作業も著しく省力化されてきた。マルチは黒 0.02 mm のポリエチレンが使用されている。

土壌消毒ーマルチ後10日くらいでマルチを切り、植えつけが行なわれるが、植えつけ後ワラで苗を覆い、防寒対策としている。

マルチが導入されたのが昭和41年であったが、地温上昇による肥大の促進や増収効果の高いことから、2～3年で普及した。生育のおう盛なことから20～30%の肥料の節減効果も認められており、10 a の成分量で窒素7～8 kg、リン酸38～40kg、カリ20～25kg程度を標準としている。

病害としては、かいよう病のほかに黒斑病、黒あざ病。害虫ではセンチュウのほか、ハスモンヨトウ、コガネムシ、エビガラスメなどの発生が多い。

収穫は7月上旬から始まり、初期はさぐり掘りとし（写真）、総掘りは後作のダイコンの播種とあわせて9月中旬から順次収穫される。平均単収は2500～3000kgである。

すでに述べたように、9月までの出荷は全体の20%不足であり、12月以降のものは貯蔵庫で翌年の6月まで貯蔵されるが、温度は13℃湿度は80～90%に保つ。貯蔵庫内での温度・湿度むらの防止が注意すべき点である。

IV 今後の問題

最近、保健野菜として甘藷が見直されてきているが、各産地とも食料甘藷への転向が多くなっており、今後市場での産

地間競争は益々はげしくなるものと予想される。

したがって、いかにして品質向上と計画出荷を行なうかが今後の課題になると思われる。この点本県のような砂地地帯は高品質生産には恵まれた条件にある。

しかし、これらの砂地地帯にも産地維持上大きな問題がある。従来、甘藷、ダイコンなどは連作障害の発生しにくい品目であるが、砂地では発生しやすく、甘藷の直接的な被害としては、かいよう病などの発生として現われる。

この対策として現在3～4年に一度新しい海砂の補給をしたり、クロールピクリンで土壌消毒を行なっているが、最近、海砂の確保が困難になり、これに代る対策が要望されている。また、社会・経済的な影響として鳴門架橋があり、観光、都市化の影響を最も強くうけるのがこの地帯であり、面積の維持も次第に困難になってくるものと考えられる。

阿部泰典 昭和27年3月、日本大学農学部卒業。徳島県農業試験場勤務、野菜栽培の試験研究に従事。60年3月、徳島県農業試験場（場長）退職。60年4月、徳島県農協中央会勤務、技術顧問現在に至る。

（読者の投稿）

共励会の上位を占めたコナフブキ

馬鈴しょは品種の更新が難しい。これは増殖率の低さや、既存銘柄を捨てたくなるほど個性的な品種が出てこないことにも原因があるのかも知れない。この傾向は欧米でも同じで、育種の盛んなオランダでさえ、古い品種ピンチがまだ四割を占めている。

しかし、近年需要が伸びてきたポテトチップ、フレンチフライなどの加工業界では、新品種の良さを認め、ワセシロ、トヨシロ、ホツカゴガネなどを使うようになってきた。また、でん粉原料用でも新品種へと変わる傾向にある。例えば、昭和三十八年以来多収共励会を続けてきている北海道東部の十勝増収記録会（昭和六〇年）によると、トップはもちろん、上位五つの内四つをコナフブキという品種は、従来の紅丸に比べ、でん粉価が三、四割も高く、省エネ品種として期待される。芽室町農協の試算では、二年平均で一ha二〇万円の収入増になるそうだが、かりにこの半分としても農業の多投入や増肥なしに今年も億単位の利益を北海道にもたらすことになるであろう。